

国立国語研究所学術情報リポジトリ

An inquiry into the procedures used to rate children's reading and writing abilities of Chinese characters with special reference to the questionnaires used for this rating

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島村, 直己, SHIMAMURA, Naomi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001089

漢字の読み書き調査の調査方法

—調査問題の作成方法の検討を中心に—

島村直己

1. はじめに

国立国語研究所言語教育研究部では、昭和57年度から3年計画で、文部省科学研究費補助金特定研究(1)「常用漢字の学習段階配当のための基礎的研究」(代表 村石昭三)の一部として、漢字の読み書き調査を行っている¹⁾。この調査は、学習指導要領に示された小学校配当漢字のすべて、およびそれ以外の常用漢字の一部について、児童・生徒の習得状況を、個々の音訓ごとに読み書きともに明らかにすることを目的とするものである。本稿は、この読み書き調査の準備の一つとして、調査問題の作成方法を検討するために行った基礎調査の報告である。

2. 調査の目的

漢字の読み書き調査において、同じ音訓であっても、調査問題の作成方法のちがいによって、調査結果(調査問題の正答率)にちがいがでてくること²⁾が、これまでにいくつか指摘されている³⁾。個々の音訓について、読みと書き(書き取り)の調査問題を作成し、児童・生徒に対して調査を実施して、その調査結果から、個々の音訓について児童・生徒の習得度を比較することができるようにするためには、一つの条件として、どの音訓についても同じ方法で調査問題を作成することが必要である。ここで報告する基礎調査では、調査問題の作成方法のちがいが、調査結果にどの程度影響を及ぼすのかを調べることを目的とした。ただし、本調査となる漢字の読み書き調査が、集団テスト方式によるペーパーテストを予定していたため、上の影響を見よ

うとした調査問題の作成方法のちがいが(このことを以下「要因」と呼ぶ)を、ひとまずつぎの三つ取り上げることにした。

- ①文脈の有無(読み書きともに)
- ②提出語彙の難易(読み書きともに)
- ③提出語彙の表記のちがいが(読みのみ)

これらについては、4の調査の結果のところ具体的に説明する。

3. 調査の方法

(1) 調査対象

秋田県・埼玉県・奈良県下の小学校各県3校計9校の小学校3年生約1,600人。(本稿の最後に調査校を一覧する。)

(2) 調査の材料

小2配当漢字・小3配当漢字各20字計40字。ただし、要因を組み合わせる調査問題を作成する都合上、音読みの場合だけを調べることにした。また、提出語彙はすべて二字漢語とした。

(3) 調査の手続き

調査学級ごとに集団テスト方式によって行った。テストは、各学級の担任教師である。

読みの場合と書きの場合とを分け、要因を組み合わせる調査問題を作成し、それを12種類の調査用紙に分けて印刷した。その12種類の調査用紙各一枚を一組にして、その中をランダムに排列し、教室での座席の順に児童に配付して、調査結果に男女差・学校差などが生じないように配慮した。調査用紙一種類あたりの児童数は130~140人である。

(4) 調査時期

昭和57年3月中旬。

4. 調査の結果

(1) 読みの場合

調査した要因と設定した水準を、つぎのように記号であらわす。

A. 文脈の有無³⁾ (制御因子)

A₁. 文脈なし

A₂. 文脈あり

A₁の「文脈なし」は、調査漢字を単語のみで提出した場合であり、そしてA₂の「文脈あり」は、単語に文脈をつけて提出した場合である。たとえば、「動(ドウ)^わ」のときには、「運動^{うん()}」や「出勤^{しゅつ()}」がA₁の「文脈なし」にあたり、「朝^{あさ}の運動^{うん()}」や「パトカーの出勤^{しゅつ()}」がA₂の「文脈あり」にあたる。

B. 提出語彙の難易 (制御因子)

B₁. やさしい語

B₂. むずかしい語

調査対象の児童にとって、どのような語がやさしくて、どのような語がむずかしいのかということが分からないため、操作的に、阪本一郎氏の「教育基本語彙」(牧書店、1958年)の中のA段階の語(小学校低学年段階の語)をB₁の「やさしい語」とし、C段階の語(中学校段階の語)をB₂の「むずかしい語」とした。

C. 提出語彙の表記のちがひ (制御因子)

C₁. 漢字表記

C₂. 交ぜ書き表記

B₁の「漢字表記」は、「運動^{うん()}」のように、提出語彙全体を漢字で書き表した場合であり、C₂の「交ぜ書き表記」は、「うん^()動」のように、読みを記入させる部分のみを漢字で書き表した場合である。

R. 漢字 (ブロック因子)

R₁. 動 (ドウ)

R₂. 船 (セン)

⋮ ⋮

∴ ∴
R₃₉. 体 (タイ)

R₄₀. 度 (ド)

この調査は、A, B, Cの各要因の効果を見ることが目的であるので、漢字 (漢字の音訓) によるそれらの効果のちがいを取り除くために、Rの「漢字」はブロック因子とした。したがって、調査の結果を述べるにあたって、特に触れることはしない。

A, B, Cの各水準を組み合わせせて作成した調査問題を、R₁の「動 (ドウ)」を例にしてつぎに示す。(原文は縦書き)

A₁ B₁ C₁: 運動^{うん()}

A₁ B₁ C₂: うん動^()

A₁ B₂ C₁: 出勤^{しゅつ()}

A₁ B₂ C₂: しゅつ動^()

A₂ B₁ C₁: 朝の運動^{あさ うん()}

A₂ B₁ C₂: 朝のうん動^()

A₂ B₂ C₁: パトカーの出勤^{しゅつ()}

A₂ B₂ C₂: パトカーのしゅつ動^()

(本稿の最後に、漢字ごとに、提出語彙と文脈を一覧する。)

A, B, C, Rの各水準の組み合わせごとに作成した調査問題の調査結果 (正答率) を表1に示す。

A, B, Cのそれぞれ設定した水準のちがいを、要因ごとに概略的に見ることにする。たとえば、要因Aについてならば、全体(2×2×2×40個)を水準A₁に属すものと、水準A₂に属すものとに二分し、それぞれの平均正答率を求める。B, Cについても同様な計算を行う。そうすると、

A₁-75.7%, A₂-78.8% ⇒ A₁<A₂

B₁-89.6%, B₂-64.9% ⇒ B₁>B₂

C₁-79.8%, C₂-74.7% ⇒ C₁>C₂

というようになる。概略的にはこのようになるが、このような分析方法は、

表 1 読みの結果

(%)

	文 脈 な し			
	やさしい語		むずかしい語	
	漢字表記	交ぜ書き表記	漢字表記	交ぜ書き表記
R 1 (動)	98.5	97.1	91.2	90.0
R 2 (船)	81.7	75.2	59.7	41.0
R 3 (発)	96.3	92.1	75.2	62.5
R 4 (会)	100.0	97.8	88.2	78.6
R 5 (活)	96.3	95.7	69.3	64.0
R 6 (来)	78.1	58.8	30.9	22.1
R 7 (実)	46.0	43.4	33.8	26.4
R 8 (教)	92.6	95.7	79.6	37.5
R 9 (題)	97.8	99.3	80.3	74.3
R10 (交)	99.3	97.1	83.8	74.3
R11 (業)	92.0	91.9	68.4	60.0
R12 (用)	96.3	92.9	92.7	87.5
R13 (野)	98.5	97.1	45.6	51.4
R14 (病)	92.0	90.4	78.7	72.9
R15 (勝)	83.1	77.1	50.4	36.8
R16 (聞)	89.7	87.1	23.4	17.6
R17 (線)	94.9	94.9	85.3	85.7
R18 (遠)	94.9	84.6	25.7	31.4
R19 (暗)	65.0	39.7	20.6	21.4
R20 (写)	91.9	97.9	79.6	64.0
R21 (作)	99.3	100.0	77.4	68.4
R22 (図)	97.1	99.3	91.2	91.4
R23 (国)	99.3	98.5	80.1	82.1
R24 (方)	95.6	94.3	88.3	79.4
R25 (味)	98.5	83.8	76.5	80.7
R26 (肉)	99.3	98.6	82.5	82.4
R27 (地)	99.3	97.1	64.0	59.3
R28 (食)	89.7	84.3	65.7	39.7
R29 (服)	97.8	97.1	83.2	71.3
R30 (切)	67.6	58.6	31.4	21.3
R31 (階)	94.9	91.2	63.2	65.0
R32 (商)	81.6	81.4	59.9	55.1
R33 (当)	86.9	78.7	58.1	45.0
R34 (対)	94.9	95.7	87.6	84.6
R35 (習)	92.0	94.1	79.4	74.3
R36 (近)	64.7	64.3	36.5	25.0
R37 (電)	99.3	96.3	92.6	90.7
R38 (去)	41.2	39.3	16.8	9.6
R39 (休)	99.3	99.3	89.1	76.5
R40 (度)	96.4	94.1	95.6	90.7
平 均	89.5	86.3	67.0	59.8

文 脈 あ り

やさしい語		むずかしい語	
漢字表記	交ぜ書き表記	漢字表記	交ぜ書き表記
99.3	99.3	95.5	93.9
83.6	78.0	65.0	42.1
99.2	96.9	81.7	72.8
99.3	100.0	91.7	89.3
100.0	97.7	71.8	61.8
83.1	68.4	33.3	18.3
62.0	58.8	35.6	29.0
92.4	91.6	78.2	58.8
100.0	99.2	80.3	80.1
97.2	97.8	90.2	75.6
95.1	97.1	75.8	68.7
99.2	98.5	91.5	90.4
98.6	99.3	58.3	58.0
93.0	94.9	90.2	74.8
93.9	71.8	52.8	52.2
98.5	92.4	13.4	12.5
97.2	96.3	93.2	92.4
95.8	85.3	35.6	24.4
75.4	46.3	25.0	26.0
97.7	97.7	74.6	71.3
99.2	98.5	70.4	75.0
95.8	98.5	88.6	90.8
98.6	98.5	81.1	74.0
97.7	97.7	85.9	91.2
97.2	80.9	84.8	76.3
99.2	99.2	78.9	86.0
98.6	97.1	77.3	70.2
91.7	87.0	57.7	46.3
99.2	96.9	71.8	74.3
78.8	58.8	43.0	30.9
95.8	97.1	74.2	67.9
95.5	87.0	66.9	61.0
93.7	92.6	65.9	51.9
97.7	97.7	87.3	82.4
95.8	94.9	81.1	74.0
85.6	79.4	41.5	30.1
98.6	98.5	88.6	88.5
59.1	49.6	7.7	14.7
99.2	100.0	82.4	67.6
97.2	96.3	97.0	93.9
93.4	89.3	69.1	63.5

つぎの三つの点で不十分である。

- ①調査した標本（児童）についてのみ比較しているにすぎない。
- ②A, B, Cの要因間の交互作用を無視している。
- ③比（正答率）から単純に算術平均を求めている。つまり、たとえば90%台の1%も50%台の1%も同じ大きさとして扱っている。

そこで、個々の正答率を角変換⁹⁾したのち、要因A, B, Cを制御因子とし、要因Rをブロック因子とした三因子乱塊法の構造模型による分散分析を行う⁹⁾。表2に、この方法による計算の結果を示す。（ただし、表2の分散分析表の値は、正答率の角変換値を100倍して得られた値である。つぎの図1では100倍していない。）また、図1に、A, B, Cの各水準の組み合わせごとに、正答率の角変換値から求めた平均値によって、それらの組み合わせ間のちがいを示す。

表 2 分散分析表（読み）

要 因	平 方 和	自 由 度	平均平方和	F 値
R	147341.01	39	3777.97	35.44**
A	1651.99	1	1651.99	15.50**
B	95030.77	1	95030.77	891.49**
C	3277.75	1	3277.75	30.75**
A × B	121.60	1	121.60	1.14
B × C	81.13	1	81.13	0.76
C × A	4.30	1	4.30	0.04
A × B × C	43.79	1	43.79	0.41
誤 差	29101.13	273	106.60	
計	276653.47	319		

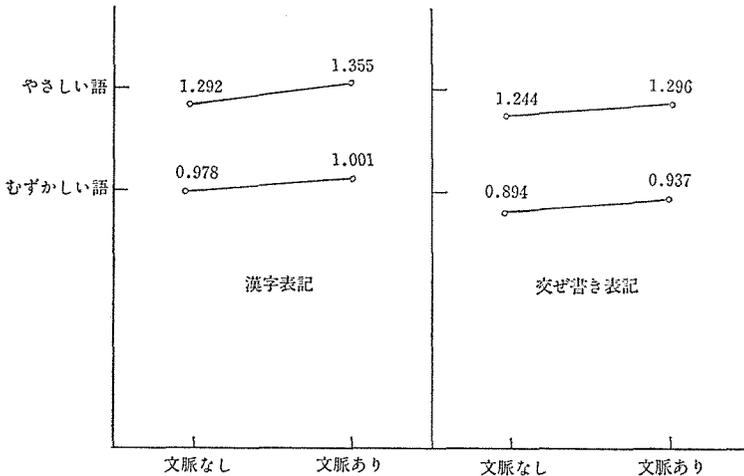
なお、全体を A_1 に属すものと A_2 に属すものとに二分し、正答率の角変換値によってそれぞれの平均を求め、そして、B, Cについても同様の計算をすると、つぎのようになる。

$$A_1 - 1.102, A_2 - 1.147 \Rightarrow A_1 < A_2$$

$$B_1 - 1.292, B_2 - 0.953 \Rightarrow B_1 > B_2$$

$$C_1 - 1.157, C_2 - 1.093 \Rightarrow C_1 > C_2$$

図 1 水準の組み合わせ間の差 (読み)



分散分析の結果、A、B、Cの主効果は、それぞれ1%の水準で有意差が認められた。しかし、A、B、C間の交互作用は、いずれも有意差が認められなかった。

以上のことから、つぎのようにまとめることができよう。

- ①「文脈の有無」(要因A)に関して、「文脈あり」(水準 A₂)のほうが「文脈なし」(水準 A₁)よりも正答率が高い。
- ②「提出語彙の難易」(要因B)に関して、「やさしい語」(水準 B₁)のほうが「むずかしい語」(水準 B₂)よりも正答率が高い。
- ③「提出語彙の表記のちがい」(要因C)に関して、「漢字表記」(水準 C₁)のほうが「交ぜ書き表記」(水準 C₂)よりも正答率が高い。
- ④要因間の交互作用が認められなかったことから、要因A、B、Cの効果はそれぞれ独立である。

なお、角変換値による、A、B、Cの各水準の組み合わせごとの平均値を大きい順に並べるとつぎのようになる。

$A_2B_1C_1$	-1.355
$A_2B_1C_2$	-1.296
$A_1B_1C_1$	-1.292
$A_1B_1C_2$	-1.244
$A_2B_2C_1$	-1.001
$A_1B_2C_1$	-0.978
$A_2B_2C_2$	-0.937
$A_1B_2C_2$	-0.894

(t検定の結果、□のところでは1%水準で、□のところでは5%水準で有意差が認められた。)

(2) 書きの場合

読みの場合と同じように、調査した要因と設定した水準を、つぎのように記号で表す。

A. 文脈の有無 (制御因子)

A₁. 文脈なし

A₂. 文脈あり

B. 提出語彙の難易 (制御因子)

B₁. やさしい語

B₂. むずかしい語

R. 漢字 (ブロック因子)

R₁. 動 (ドウ)

R₂. 船 (セン)

⋮ ⋮

R₃₀. 体 (タイ)

R₄₀. 度 (ド)

A, B, Rそれぞれの要因の内容については、読みの場合と同じである。また、材料とした漢字、提出語彙、文脈についても、読みの場合と同じである。R₁の「動(ドウ)」を例にして、A, Bの各水準の組み合わせごとに作

表 3 書きの結果

(%)

	文脈なし		文脈あり	
	やさしい語	むずかしい語	やさしい語	むずかしい語
R 1 (働)	85.9	60.2	87.9	64.9
R 2 (船)	56.3	21.5	53.0	40.2
R 3 (発)	84.4	57.8	85.1	71.2
R 4 (会)	97.0	68.0	97.0	62.7
R 5 (活)	84.4	41.5	85.1	34.1
R 6 (米)	71.9	69.5	77.3	60.4
R 7 (実)	34.8	32.8	37.1	31.3
R 8 (教)	80.5	30.4	79.9	37.9
R 9 (題)	67.2	34.1	66.4	51.5
R10 (交)	86.7	25.8	84.1	30.6
R11 (業)	58.5	25.8	61.4	26.9
R12 (用)	67.2	(31.4)	83.6	50.8
R13 (野)	91.9	17.2	92.4	11.9
R14 (病)	71.9	32.0	69.7	44.8
R15 (勝)	47.7	25.9	51.5	30.3
R16 (聞)	64.8	8.1	75.4	8.3
R17 (線)	60.0	35.9	62.1	47.0
R18 (遠)	74.1	18.0	74.2	17.2
R19 (暗)	30.4	21.9	29.5	20.1
R20 (写)	69.5	8.1	70.9	6.1
R21 (作)	94.5	83.7	96.3	83.3
R22 (図)	88.9	83.6	90.2	86.6
R23 (国)	97.8	78.1	98.5	91.0
R24 (方)	89.8	45.2	91.8	43.9
R25 (味)	71.9	54.7	69.7	56.7
R26 (肉)	94.5	82.2	95.5	78.0
R27 (地)	94.8	61.7	93.2	62.7
R28 (食)	80.5	57.0	82.8	78.0
R29 (服)	73.4	23.0	77.6	18.2
R30 (切)	59.4	28.9	61.9	34.8
R31 (階)	58.5	14.1	59.1	12.7
R32 (商)	50.8	14.8	50.7	12.1
R33 (当)	61.5	24.2	69.7	17.9
R34 (対)	81.3	54.8	78.4	61.4
R35 (習)	81.5	18.8	83.3	17.2
R36 (近)	63.3	13.3	61.9	11.4
R37 (電)	94.8	88.3	97.0	88.1
R38 (去)	37.5	15.6	41.8	15.2
R39 (体)	88.3	45.2	88.8	32.6
R40 (度)	85.2	60.9	86.4	64.2
平 均	73.3	40.4	75.0	42.9

成した調査問題を示す。(原文は縦書き)

A₁B₁: 運^{うんどう}□

A₁B₂: 出^{しゅつどう}□

A₂B₁: 朝^{あさ}の運^{うんどう}□

A₂B₂: パトカーの出^{しゅつどう}□

書きの場合の調査結果を表3に示す。なお、A₁B₂R₁₂ (「文脈なし」「むずかしい語」「用(ヨウ)」)は、実際には、印刷の誤りのため集計から削除した。しかし、表に、括弧をつけて、ほかの値の角変換値から推定した値に対応する百分率を記入した⁷⁾。

読みの場合と同じように、正答率を角変換したのち、A、Bを制御因子とし、Rをブロック因子とした二因子乱塊法の構造模型による分散分析を行う。その結果を表4に示す。(読みと同じく、角変換値を100倍して得られたものである。図2では100倍していない。)また、角変換値によるA、Bの各水準の組み合わせごとの平均値のちがいを図2に示す。

表4 分散分析表(書き)

要 因	平方和	自由度	平均平方和	F 値
R	74541.88	39	1911.33	12.14**
A	209.76	1	209.76	1.33
B	54493.92	1	54493.92	346.10**
A×B	2.26	1	2.26	0.01
誤 差	18264.48	116	157.45	
計	147512.30	158		

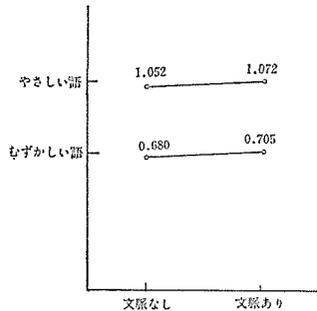
欠値となった A₁B₂R₁₂ の値を推定値によって代用し、全体を A₁ に属するものと A₂ に属するものとに二分し、それぞれの正答率の角変換値による平均値を求める。Bについても同様の計算を行う。そうすると、

$$A_1 - 0.866, A_2 - 0.889 \Rightarrow A_1 < A_2$$

$$B_1 - 1.062, B_2 - 0.693 \Rightarrow B_1 > B_2$$

分散分析の結果、Bの主効果については1%の水準で有意差が認められ

図 2 水準の組み合わせ間の差（書き）



た。しかし、Aの主効果については有意差が認められなかった。また、AとBの交互作用も有意差が認められなかった。なお、交互作用項を誤差項にプールしたのち再度検定しても、結果は同じであった。

以上のことから、つぎのようにまとめることができよう。

- ①「文脈の有無」（要因A）に関して、「文脈なし」（水準 A_1 ）と「文脈あり」（水準 A_2 ）とでは正答率の大きさにはっきりとしたちがいが認められない。
- ②「提出語彙の難易」（要因B）に関して、「やさしい語」（水準 B_1 ）のほうが「むずかしい語」（水準 B_2 ）よりも正答率が高い。

読みの場合と同じように、正答率の角変換値による平均値によって、A、Bの各水準の組み合わせを大きい順に並べるとつぎのようになる。

$$A_2B_1 - 1.072$$

$$A_1B_1 - 1.052$$

$$A_2B_2 - 0.705$$

$$A_1B_2 - 0.680$$

（t検定の結果、□のところで1%水準で有意差が認められた。）

5. 調査のまとめと考察

調査の結果をもう一度要因別にまとめ、それに若干の考察を加えることに

する。

①読みの場合、文脈の有無によって正答率に差が認められた。「文脈あり」>「文脈なし」これは、文脈をつけることによって、提出語彙の類推がしやすくなるためであると考えられる。たとえば、「動」という漢字の読みについて、「運動^{うんどう}」や「出勤^{しゅつごう}」とだけ提出するよりも、「朝の運動^{あさのうんどう}」や「パトカーの出勤^{しゅつごう}」と提出するほうが、提出語彙がどのような語であるかを推定する上で多くの情報が与えられており、その結果、正しい読みを与えやすくなるのだと思われる。

これに対し、書きの場合では、文脈の有無によって正答率にはっきりとした差が認められなかった。文脈をつけることによって、提出語彙の意味理解がしやすくなることは確かである。しかし、書きのテストで正答を得るためには、提出語彙の漢字で書くことを要求された部分を、どのような漢字で書くべきかということを知っていることが、なによりも必要とされる。たとえば、「運^{うん}□^{どう}」という問題ならば、「どう」の部分は「動」という漢字を書く、ということを知っていることがなによりも必要なことである。そのため、提出語彙に文脈をつけた効果が認められなかったのではないかと思われる。(ただし、この調査では、同音語のある提出語彙は努めて除くようにした。)

②読みの場合でも書きの場合でも、提出語彙の難易が大きな要因となっている。「やさしい語」>「むずかしい語」

この調査では、操作的に、阪本一郎氏の「教育基本語彙」のA段階の語をやさしい語とし、C段階の語をむずかしい語としただけで、語の難易についての意味づけを行わなかった。しかし、やさしい語を児童の言語生活の中でよく用いられる語と考えるならば、上の結果は当然と言えよう。読みの場合、文字（漢字）を読んで、どのような語であるかを確定することが、その簡略なプロセスであると考えられる。そして、書きの場合では、語を確定して、それを文字（漢字）で書き表すことが、その簡略なプロセスであると考えられる。したがって、児童がよく用いて

いる語であれば、そのようなプロセスを経るのに必要な情報が多く得られることが期待されよう。

- ③読みの場合、提出語彙の表記のちがいによって正答率に差が認められた。「漢字表記」>「交ぜ書き表記」)

この調査の提出語彙は漢語である。成人社会では、漢語は漢字で書き表されることが普通なため、交ぜ書き表記は読みにくいと言われる。児童の場合もはたしてこれと同じ理由によるのか不明であるが、小学校の教科書には漢語の交ぜ書き表記が多いことを考えると、この結果はきわめて興味深い。

6. おわりに

この調査は、小学校3年生を対象に行ったものである。小学校高学年の児童を対象にした場合でも、はたしてこれと同じ結果を得ることができるかどうか、これからの検討が必要とされよう。また、この調査では、漢字（漢字の音）とそれ以外の要因との交互作用を無視した構造模型によって分析を行った。この理由は、調査の目的が、「文脈の有無」「提出語彙の難易」「提出語彙の表記のちがい」の三つの要因を吟味することにあったからであるが、仮にそのような交互作用があったとしても、それは、単に、提出語彙によって、「文脈の有無」と「提出語彙の表記のちがい」の二つの要因の効果が異なるということを示しているにすぎないと思われたからでもある。この二つの要因については、さらに詳しく検討する必要があるだろう。たとえば、「文脈の有無」にしても、児童に適切な文脈であるかどうかによって、結果にかなりのちがいがでると思われる。また、「提出語彙の表記のちがい」にしても、読むことを要求される漢字に組み合わせられる漢字が、むずかしいかやさしいかで、結果にちがいがでてくるとと思われる。

【注】

- 1) この読み書き調査は、つぎの三つの調査から成る。

①定着度調査

小学校各学年配当漢字について、それぞれ配当学年の一年前・一年後・二年後・四年後の学年の児童・生徒を対象に、音訓別読み書き調査を行う。また、これ以外の常用漢字の一部についても、これに準じて調査を行う。

②到達度調査

小学校各学年配当漢字について、それぞれ学校での学習の終了時点で音訓別読み書き調査を行う。

③習得量調査

中1・高1各10名に対して、常用漢字全数の音訓別読み書き調査を行う。

- 2) たとえば、国立国語研究所「高学年の読み書き能力」(秀英出版, 1960年)や、福沢周亮「漢字の読字学習」(学燈社, 1976年)では、読みについて、同じ音訓でも提出語彙が異なると正答率が異なるということを指摘している。特に、後者では、提出語彙の熟知度と漢字の読みとの関係について、詳細な分析を行っている。

また、吉田章宏他「漢字の教授=学習」(東京大学教育学部紀要第14巻, 1974年)では、書きのテストについて、「(A)文字・読み・単語が共通で、文章のみが異なる。(B)文字と読みが共通で、単語・文章が異なる。(C)文字のみが共通で、読み・単語・文章が異なる。」という三つの場合を検討し、(A)では正答率にほとんどちがいがながい、(B)、そして特に(C)でちがいが見られたということを指摘している。

なお、本稿では、やや熟していないことばであるが、「書き取り」のことを「書き」ということにする。

- 3) この調査で「文脈」と呼ぶものは、「単語の前後につけたことば」のことを指している。

- 4) 漢字のうしろに括弧をつけて、提出した漢字の音訓を示す。

- 5) 角変換は、 $u = \sin^{-1} \sqrt{x}$ (x : 正答率) の式によって行った。ただし、ラジアンによる。奥野忠一他「実験計画法」培風館, 1967年, 241 ページを参照。

- 6) $x_{ijkl} = \mu + \alpha_i + \beta_j + \gamma_k + \delta_l + (\alpha\beta)_{ij} + (\beta\gamma)_{jk} + (\gamma\alpha)_{ki} + (\alpha\beta\gamma)_{ijk} + \epsilon_{ijkl}$
(δ_l : ブロック効果)

の構造模型による。書きの場合でも同様な構造模型による。早川毅「実験計画法の基礎」朝倉書店, 1977年を参照。

- 7) 近藤良夫他「統計的方法百問百答」日科技連, 1967年, 150 ページを参照。

〔付記〕

本稿は、日本読書学会第27回研究大会(昭和58年7月29日)において、村石昭三と連名で発表したものをまとめたものである。調査問題の作成、および児童の解答の正誤判定に、言語教育研究部の川又瑠璃子の助力を得た。また、調査の実施には言語教

育研究部全員の助力を得た。なお、最後になったが、調査校から多大の協力を受けた。記して感謝する。

本研究は、昭和56年度文部省科学研究費補助金総合研究(B)『『常用漢字の学習段階配当のための基礎的研究』にともなう研究計画の検討』(代表 林大)、および昭和57年度文部省科学研究費補助金特定研究(1)『常用漢字の学習段階配当のための基礎的研究』(代表 村石昭三)の一部として行ったものである。

〔調査校〕

秋田県秋田市立旭北小学校 (校長：熊谷昌太郎)

同 旭川小学校 (校長：佐藤光)

同 東小学校 (校長：松本秋次)

埼玉県大宮市立西小学校 (校長：関根健)

同 大成小学校 (校長：岡村敏郎)

同 宮原小学校 (校長：須藤忠七)

奈良県香芝町立三和小学校 (校長：山本輝一)

同 新庄町立新庄小学校 (校長：杉本恒寿)

同 当麻町立磐城小学校 (校長：当麻林平)

〔調査問題〕

各漢字について、調査した漢字の読み、提出語彙(下線を引いて示した)、文脈を一覧する。実際の調査問題は、130ページと137ページに示した例のように作成した。

漢 字	音 訓	A 段 階	C 段 階
動	ドウ	朝の <u>運動</u>	バトカーの <u>出動</u>
船	セン	タンカーの <u>船長</u>	日本丸の <u>船医</u>
発	ハツ	研究の <u>発表</u>	熱を <u>発散</u> する
会	カイ	<u>会社</u> につとめる	<u>夜会</u> にでかける
活	カツ	たのしい <u>生活</u>	<u>活路</u> をみいだす

漢 字	音 訓	A 段 階	C 段 階
来	ライ	ことしと <u>来年</u>	<u>来歴</u> をかたる
実	ジツ	<u>実際</u> にあった話	<u>実直</u> な人がら
教	キョウ	わたしの <u>教室</u>	<u>教養</u> をたかめる
題	ダイ	<u>宿題</u> をすませる	<u>例題</u> をとく
交	コウ	<u>交通</u> の中心	証明書の <u>交付</u>
業	ギョウ	入学と <u>卒業</u>	<u>業績</u> をのこす
用	ヨウ	火の <u>用心</u>	きそくの <u>適用</u>
野	ヤ	野球の <u>試合</u>	この <u>分野</u> の専門家
病	ビョウ	<u>病気</u> にかかる	病状が悪化する
勝	ショウ	<u>勝負</u> がつく	<u>必勝</u> をちかう
聞	ブン	<u>新聞</u> をよむ	<u>外聞</u> がわるい
線	セン	<u>点線</u> でむすぶ	私鉄の <u>沿線</u>
遠	エン	<u>遠足</u> にでかける	<u>遠大</u> な計画
暗	アン	<u>暗算</u> でこたえる	<u>暗雲</u> がたれこめる
写	シャ	<u>写真</u> をとる	本の <u>複写</u>
作	サク	<u>作文</u> をかく	<u>著作</u> にふける
図	ズ	<u>図画</u> のじかん	<u>図表</u> にあらわす
国	コク	<u>外国</u> にいく	日本の <u>国技</u>
方	ハウ	こっちの <u>方角</u> が北です	<u>方策</u> がたたない
味	ミ	ことばの <u>意味</u>	<u>風味</u> にとむ
肉	ニク	<u>牛肉</u> をたべる	<u>肉筆</u> のサイン
地	チ	<u>土地</u> がひろい	<u>地表</u> の7/10は海です
食	ショク	<u>食後</u> の散歩	この料理には <u>食傷</u> した
服	フク	<u>洋服</u> を着る	<u>服務</u> につく
切	セツ	小さな <u>親切</u>	<u>適切</u> な助言
階	カイ	<u>階段</u> をのぼる	軍隊の <u>階級</u>

漢 字	音 訓	A 段 階	C 段 階
商	ショウ	<u>商売</u> がはんじょうする	<u>商談</u> がまとまる
当	トウ	きょうの <u>当番</u>	<u>当座</u> をしのぐ
対	タイ	さんせいと <u>反対</u>	東西の <u>対決</u>
習	シュウ	そろばんの <u>練習</u>	<u>慣習</u> にしたがう
近	キン	<u>近所</u> の店	大臣の <u>側近</u>
電	デン	<u>電気</u> をつける	<u>電圧</u> をはかる
去	キョ	<u>去年</u> とことし	<u>退去</u> の命令
体	タイ	<u>体操</u> の選手	むずかしさを <u>体得</u> する
度	ド	<u>今度</u> はわたしの番	<u>限度</u> をまもる